常葉大学経営学部紀要
第2巻第1号，2014年9月，19－27頁

# イングランド地方の小学校におけるシェイクスピア教育の理想形とは－
## 2008年の場合

佐　藤　由　美

# How Should Shakespeare Be Taught at Primary Schools in England?-
## The Case in 2008

Yumi　SATO

**（要　旨）**

現在イングランド地方ではシェイクスピア作品の教育を受け始める年齢は、正式には学習指導要領で中学に入学する年齢である12歳からと定められている。しかし、2008年に大々的に行われたキャンペーンでは、小学生のうちにシェイクスピア教育を開始すべきであるという提唱がなされた。このキャンペーンは子供・学校・家族省（当時。以下DCSF）およびイギリスを代表する劇団の一つであるロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（以下RSC）により個別に行われたが、主張は上述のように共通していた。

当時の学習指導要領においても小学校教育に関しては、読む、聞く、話すことと共に演劇が重視されてはいたが、古典作品を読み始めるのは中学に入ってからと法的に定められていた。が、これは小学校におけるシェイクスピア教育を禁じるものではなかった。本研究では、2008年に行われた二つのキャンペーンは小学校における教育の意義をどうとらえたか、いかなる形で行われたか、発行されたブックレットやオンラインデータの詳細を点検して、現代イギリスの教育界におけるシェイクスピアの意義を考察した。

DCSFによるブックレットでは、劇団との協力を伴う、小学校入学時から義務教育終了後まで学年ごとの綿密な計画が強調され、RSCによるブックレットおよびオンラインデータからは、作品を演じるものとして扱い古典は退屈なものではないことを強調する路線が示された。

金融不安が本格化しつつあったという時代背景を考えれば、両者ともシェイクスピアの権威を利用して理想の教育像を掲げたといえる。このキャンペーンに対する子供たちの反応が暗示することは、彼らは様々な反応を示したが、中にはシェイクスピア作品の魅力を自分なりに把握した者もいたということである。今後もシェイクスピアは多様な形で利用され、受け入れられるであろう。

**（キーワード）**

シェイクスピア作品、上演研究、イギリス演劇、イギリスの教育制度、マルチメディア

**（英文要旨）**

Nowadays, according to the national curriculum in England, children should be educated Shakespeare's works from the age of 12, when they enter secondary schools. In the year 2008, however, British people found two campaigns suggesting that children should be educated Shakespeare while being primary school pupils. The campaigns were launched separately by the Department of Children, Schools and Families (DCSF) and the Royal Shakespeare Companies (RSC).

The national curriculum in 2008 also assigned classic literature for secondary school students. The curriculum, however, did not ban Shakespeare education at primary schools. In this essay, I examined the details of the two campaigns to know how the two organizations regarded the importance of early education of Shakespeare, and in which way the campaigns were launched. Then I intended to discuss the significance of Shakespeare at that period of time.

The booklet issued by DCSF emphasized detailed plans prepared for each year, ranging from the first school year until after the compulsory education, in cooperation with theatre companies. The RSC's booklet and their online data showed their emphasis on the nature of the works as scripts; it thus claimed that the works were not boring.

Considering that the financial instability began to grow, it can be said that both of the organizations showed what was ideal for them, making use of the authority of Shakespeare. Children's reactions to these campaigns were various, but some of them enjoyed the works, finding them interesting. This suggests that the works will be used for education, and accepted in various ways in the future.

## はじめに

現在シェイクスピア作品は多くの国や地域で古典文学の一部として認識されている。日本のように、高校の英語のテキストで有名な場面を紹介するといった形で教育に用いられることもある。

シェイクスピアの出身地であるイギリスにおいて、その作品はどのような形で教育されているだろうか。イギリス人が作品をどう捉えているかは、教育に大きく影響を受けていると思われる。例えば、研究者ではないイギリス人とシェイクスピアについて語る際、授業で語彙や複雑な構文に悩まされてきたと聞かされることがある。彼らの話からは、小学校時代から学校でシェイクスピアを教育されている者もいること、おそらくは少なからぬ人々が作品の読解に苦心したため、それらに悪印象を抱いていたり関心を失っていたりすることがうかがえる。一方で、イギリスでシェイクスピア作品が上演される際、観光地を除けば圧倒的多数の観客はイギリス人である。時には小学校児童とおぼしき子供たちの集団に遭遇することがあり、子供たちにも観劇が奨励されていることがうかがえる。

このような事例が示唆しているのは、イギリスの子供たちは学校教育という強制された形でシェイクスピア作品に触れるが、成長するにつれそれらの鑑賞を楽しむようになる者も少なくないということである。新聞やテレビニュースにおいても児童・生徒に対するシェイクスピア教育の現状や、またはそのあるべき姿に関する報道を目にすることもある。とはいえ、“Five-Year-Olds to Study Shakespeare”[1]や“Shakespeare 'for Five-Year-Olds'”[2]といった見出しで始まる2008年の記事はイギリス人以外の読者には驚きを与える。5歳とは、イギリスでは義務教育が始まる年齢である。これらの記事から、2008年から小学校で実際に古典教育が始まったのか、2008年以前はどうだったのだろうかなどの疑問が生じる。

上述の記事は*Shakespeare for All Ages and Stages*（以下*Ages and Stages*）と題されたブックレットに代表される、子供・学校・教育省（Department for Children, Schools and Families、以下DCSF。後にDepartment for Education教育省に改組）を中心としたキャンペーンに言及している。[3]また、同年にはロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（Royal Shakespeare Company、以下RSC）の教育部門によるStand Up for Shakespeare（以下SUFS）と呼ばれるキャンペーンも展開された。両方に関連した人々も多いことから、これらの概要を知ることによって、当時の教育関係者にとって小学生への理想的なシェイクスピア教育法はいかなるものであったか、その一端を知ることができると思われる。それらのキャンペーンの内容を探るとともに、当時の英語教育の指針や文化的背景を視野に入れてキャンペーンの意義や影響を考察したい。

### 1　当時の小学校における英語教育

最初に、イギリスの教育制度の概要を述べる。日本との目立った相違点は、地方により学校制度が異なっていること、日本の学習指導要領にあたるナショナル・カリキュラム（National Curriculum、以下NC）が1988年に制定、1989年に施行されるという比較的新しい制度であること（以来数度にわたり改訂されている）、およびNCに示される教育方針は一年ごとではなく、基本的にキー・ステージ（Key Stage、以下KS）という数年ごとの単位で示されることである。義務教育の期間は5歳から16歳までの11年間であるが、そのうち5〜7歳はKS1、8〜11歳はKS2、12〜14歳はKS3、15〜16歳はKS4と分けられ、KS1および2が小学校（primary school）、KS3および4が中学校（secondary school）にあたる。各科目に法的な（statutory）要件とそうではない要件があり、後者は生徒の学力や学校の難易度に応じて履修することができる。本稿では面積および人口ともに国内最大であるイングランド（およびウェールズ）の制度を取り上げ、小学生、すなわちKS1およびKS2の児童への教育を重点的に見ることとなる。

2008年当時、英語教育に関するNCの内容はどのよう

であっただろうか。KS1 および KS2 の NC でシェイクスピアと何らかの形で関連があると思われる項目をあげる。いずれの KS においても英語教育は“Speaking and listening”、“Reading”、“Writing”という 3 つのカテゴリーに大別され、最初のカテゴリーでは演劇に関する言及が“Drama”および“Drama Activities”という項目でなされている。KS1 の“Drama”では

> To participate in a range of drama activities, pupils should be taught to: a) use language and actions to explore and convey situations, characters and emotions, b) create and sustain roles individually and when working with others, c) comment constructively on drama they have watched or in which they have taken part.[4)]

“Drama Activities”は“The range should include: a) working in role, b) presenting drama and stories to others [for example, telling a story through tableaux or using a narrator], c) responding to performances.”と記述されている。

KS2 の“Drama”では以下のような言及がある。

> To participate in a wide range of drama activities and to evaluate their own and others' contributions, pupils should be taught to: a) create, adapt and sustain different roles, individually and in groups, b) use character, action and narrative to convey story, themes, emotions, ideas in plays they devise and script, c) use dramatic techniques to explore characters and issues [for example, hot seating, flashback], d) evaluate how they and others have contributed to the overall effectiveness of performances.[5)]

“Drama Activities”は、“The range should include: a) improvisation and working in role, b) scripting and performing in plays, c) responding to performances.”と記述されている。

“Reading”というカテゴリーでは、それぞれの KS で読むべき作品があげられている。KS1 で読むべき作品については“Literature”および“Nonfiction and Nonliterary Texts”と大別されており、前者で読むべきものは“a) stories and poems with familiar settings and those based on imaginary or fantasy worlds, b) stories, plays and poems by significant children's authors, c) retellings of traditional folk and fairy stories, d)stories and poems from a range of cultures, e) stories, plays and poems with patterned and predictable language, f) stories and poems that are challenging in terms of length or vocabulary, g) texts where the use of language benefits from being read aloud and reread”、後者については“a) print and ICT based information texts, including those with continuous text and relevant illustrations, b) dictionaries, encyclopedias and other reference materials”があげられている。

KS2 ではそれぞれ“a) a range of modern fiction by significant children's authors, b) long-established children's fiction, c) a range of good-quality modern poetry, d) classic poetry, e) texts drawn from a variety of cultures and traditions, f) myths, legends and traditional stories, g) playscripts”、および“a) diaries, autobiographies, biographies, letters, b)print and ICT based reference and information materials [for example, textbooks, reports, encyclopedias, handbooks, dictionaries, thesauruses, glossaries, CDROMs, internet], c) newspapers, magazines, articles, leaflets, brochures, advertisements”があげられている。

これらの記述から読み取れることは、演劇を学ぶことが小学校低学年の時点で重視されていることである。しかし、同時に指摘しておかねばならないのは、生徒が古典作品を読み始めるのは KS2 以後であり、それも「古典的な詩」のみであるということである。シェイクスピア作品を読むことが必修になるのは古典作品を本格的に読み始める KS3 に入ってからであり、“two plays by Shakespeare, one of which should be studied in key stage 3”と指定されている。[6)]

ある程度以上の年齢（おおむね中等教育該当）に達した生徒はシェイクスピア作品を通して古典教育を受けるべきであるという議論は、20 世紀初頭から見られるようになったと思われる。NC が制定される際にもこの議論は活発になり、中学生は作品を何点か読むべきであるという結論が出された。[7)]一方で、小学校でもシェイクスピア教育を行うべきだという意見も根強く出されていたし、NC の規定はそれを禁じるものではなかった。小学校によってはすでに早期教育が行われていた。20 世紀末に行われた、この種の教育の中で大規模なものとしては、例えば英国王立芸術協会（Royal Society of Arts、通称

RSA）が 1992 年に提唱したプロジェクトがある。5 歳以上の生徒たち全てにシェイクスピア作品を紹介することを目的として、RSC などの劇団、大学の研究者、地方の教育委員会とプロジェクトチームを結成し、同プロジェクトに関心を持ついくつかの小学校で上演活動を展開した。1997 年には様々なクラスにおける教育成果を発表した。[8] そのクラスには能力差のある生徒たちから成るものや移民の生徒を含むものもあり、また、全校でプロジェクトを実施したケースもあった。

それでは、2008 年において、小学校時代からシェイクスピア教育を児童・生徒に施そうとしたのは誰のどのような意図が働いているのか、いかなる背景のもとで行われたのか、以下で上げる二つのブックレットから考えたいと思う。

## 2 *Shakespeare for All Ages and Stages*

このブックレットは 2008 年 7 月に全国の小中学校に無料配布され、さらに小学校にはシェイクスピア作品を収録した無料 DVD が添付された。多額の予算が費やされただろうと推測される。「全ての年齢とステージのためのシェイクスピア」というタイトルからうかがえるように、幼児教育の時期から義務教育終了後に至るまでさまざまな KS の児童・生徒に対する教育方針や活動内容が、教師を対象として提唱されている。現在でもインターネット上で読むことのできるこのブックレットの構成および概要を述べながら、多くの労力と予算を費やすことで訴えかけようとしたことは何か、考えたい。

序文は学校大臣（当時）ジム・ナイト（Jim Knight）によるもので、このブックレットを作成した背景について以下のように述べている。

> Whilst not part of the statutory programme of study in Key Stages One or Two, many primary teachers find that imaginative and practical approaches to Shakespeare can spark children's enthusiasm and interest, the desire to study his plays further, and a lifelong love of Shakespeare's work.[9]

この一節からうかがえることは、実際に古典教育が始まるのは中学入学後であるとはいえ、一部の小学校ではすでに教育が始められていること（前述のように RSA も実践している）、また、その結果をもとに、彼らは幼いうちからシェイクスピア作品を受け容れる感受性があるので教師はそれらを奨励すべきであるとナイトが考えるに至ったことである。ナイトを始めとしてブックレット発行に携わった人々の間では、中学校以降ではシェイクスピア教育を始めるには遅いという主張する根拠があったことがうかがえる。

その後、目次を経て前書きでこのブックレットの目的が明らかにされる。“It aims to enhance the educational experience of Shakespeare for young people by providing a map of opportunities for lifelong learning and pleasure in his work.”[10] という一節は、教育の場におけるシェイクスピア体験を促進することで、子供たちが早期から、そして生涯にわたって作品に親しむように仕向けたいという意向を明らかに示している。

次のページでは子供たちがいかなる形でシェイクスピア作品を勉強するべきかが解説されている。“Watching, performing and reading the work of this extraordinary poet and playwright asks us both to challenge and celebrate our social and personal lives.”[11] というくだりからは、イギリス人にとってシェイクスピア作品は読むのみならず、鑑賞して自分でも演ずる対象であるという認識がうかがえる。

“A framework of opportunities in Shakespeare across the key stages”と題されたページでは、学習の枠組みが示されている。左のページでは KS ごとに体験しておけばよいこと、右のページでは、1 学年ごとの学習目標を設け詳細に説明している。例えば、幼児教育時代（foundation age）から KS1 にかけて推奨されている体験は以下のとおりである。

> ・Watch, read or listen to some of Shakespeare's stories
> ・Use role play to explore some of the characters' dilemmas in Shakespeare's stories
> ・Act out, through role play and improvisation, some stories or scenes from Shakespeare[12]

小学校低学年のうちに、簡略化された形とはいえ作品を読み聞きするのみならず演ずることが望ましいとしている。

KS2 については以下のような体験を勧めている。

> ・Read or watch an abridged version of a Shakespeare play
> ・Read, perform and talk about lines taken from scenes from speeches from Shakespeare's plays
> ・Work, if possible, with arts educators such

as theatre-in-education groups
・Experience, if possible, some learning outside of the classroom, such as a visit to a theatre or a relevant site
・Use dramatic approaches to explore some of Shakespeare's scenes[13)]

注目に値する点は、シェイクピアのオリジナル作品の一部なりとも演じさせようとしていることや、さらに劇団の教育担当部門との連携を推奨していることである。

KS1 から KS2 にかけての学習目標は学年ごとに以下のように提案されている。

**Year 1** To realise that stories can be told in different ways, including dramatisation
**Year 2** To be familiar with some of Shakespeare's stories and characters
**Year 3** To appreciate how characters are brought to life through performance
To understand that the text is a script which is brought to life in performance
**Year 4** To be familiar with Shakespeare's life, times and theatre
**Year 5** To identify some of the distinctive features of Shakespeare's language and how language has changed over time
To appreciate how characters interact and create dramatic tension through their language and actions
**Year 6** To explore some of the great themes of Shakespeare's plays, such as kingship, romance and ambition[14)]

一連の学習目標をみていくと、KS3 および KS4、すなわちシェイクスピア作品の学習が法的要件とされている年代と同様の分量と詳細な記述で、KS1 および KS2 におけるシェイクスピア教育が奨励されていることがわかる。その後、“Suggested teaching approaches from the Foundation Stage to Key Stage 4”と題された、ブックレットの本題と思われる部分があるが、そこでは幼児教育時代から義務教育終了年に至るまで一学年ごとの教育方法を 1〜2 ページずつかけて詳細に提案している。

ブックレットの末尾に掲載されているのは、2 つの組織によるシェイクスピアを通した演劇教育の推奨である。“Working with a theatre practitioner in schools - guidance from Globe Education, Shakespeare's Globe”および“Preparing pupils for a theatre visit - suggestions from the RSC”と題されたほぼ 2 ページずつの項目で、前者はシェイクスピア・グローブ座（Shakespeare's Globe 以下グローブ）による観劇およびその前後に学校で行うべきプログラム、後者は RSC による学校でのワークショップを紹介している。いずれも、シェイクスピア作品を自ら演じるための学習内容を、演劇の専門家が学校と交流するという形で展開するものである。末尾に至るまで随所に、子供たちが学習している写真や、彼らの描いたイラストないし感想を掲載したページが挿入され、教育に成功した場合彼らがどれほどシェイクスピア作品を興味深く感ずるかが強調されている。

最終ページにはブックレット作成に協力した 20 名の氏名および役職が記されている。政府関係者、大学の研究者、劇団関係者、教師ないし教育関連団体所属者、報道関係者（BBC）といった人々が関連したことがわかる。前書きでも既に多くの人々の協力があったことがほのめかされているが、最終ページを見ることによりあらためて、イギリスにおける理想的なシェイクスピア教育を実施するには、教師のみならず、演劇的手法を子供たちに教える人々、教育の成果を資料にまとめ多様な角度からそれらを検討する人々が、より綿密な計画を掲げ、より早期からのシェイクスピア教育に関わるべきである、と、政府自らが宣言したように思われる。

### 3　キャンペーン Stand Up for Shakespeare

次に、RSC が同年 3 月に公表したキャンペーンについて解説する。これは、子供や若者がシェイクスピア作品への関心を高めるよう奨励することを目標とし、現在でも（インターネット上で）読むことのできるブックレットを配布したり、ホームページ上にキャンペーン用のページを設けたり、著名な俳優がこのキャンペーンを推薦している様子をユーチューブで配信するといった活動が行われた。[15)] 主要なブックレットは、*Stand Up for Shakespeare: A Manifesto for Shakespeare in Schools*（以下 *SUFS*）である。[16)] キャンペーン用のページではブックレットを掲載するほかに、趣旨に賛同する若者へのオンライン署名を呼びかけ、約 15000 人が署名したという記録が残っている。[17)] 現在、キャンペーンに使われたページは閲覧することができないため、ここでもブックレットの詳細をあげ、キャンペーンの特徴を考察する。

*SUFS* は表紙を除けば正味 7 ページという簡素なものである。表紙にはキャンペーン名と“Do it on Your Feet”, “See it Live”, “Start Earlier”という 3 つのスローガンが掲げられている。1 ページには芸術監督（当

時）マイケル・ボイド（Michael Boyd）の言葉があるが、冒頭の“Shakespeare wrote plays and young children are geniuses at playing”という一言で、子供たちには演じる力があるのだからこれらの作品は重視する価値があるという認識を明らかにしている。2ページではブックレットの目的が示される。

> Many young people first encounter Shakespeare as readers in their English classroom, often in preparation for tests or examinations. In contrast, actors and theatre practitioners work with his plays actively and collaboratively, in preparations for live performance. We believe that this practical approach is the most engaging way for young people to develop a real understanding of Shakespeare's stories, characters and language.

シェイクスピアが退屈に感じられるのはテスト勉強の一環として教室で読むからであり、演劇として体を動かして取り組めば劇中世界を真に理解できるのだという言葉は、古典の授業を好まない子供たちにも訴えかけるものがあったと思われる。そして、3つのスローガンがこのページに再び掲載され、さらにそれぞれの下に解説がついている。“Do it on your feet: Explore plays as performers do.”“See it live: Participate as members of a live audience.”“Start it earlier: Experience Shakespeare from a younger age.” 最後のスローガンが比較級で表されていることで、子供たちにより幼いうちからシェイクスピア体験をしてほしいという切実な要望が感じ取れる。

3ページでは“Do it on your feet”の解説がなされる。“Many students who find Shakespeare boring say that sitting at desks and reading the plays, rather than performing them, is one of the main frustrations.”から始まり、劇団関係者は体を動かしながらアプローチする方法を教えるという解説がある。4ページには“See it live”の解説として、“The sensory act of hearing, seeing and feeling the sounds, rhythms and words aid comprehension in a way that reading the play cannot.”と、実際に演じられているものを見ることの重要性を強調している。5ページでは“Start it Earlier”の解説がある。多くの小学生は、劇団関係者の教えることを楽しむことができるのに、現行のカリキュラムではKS3、すなわち中学校でようやくシェイクスピアなどの古典授業が始まり、それでは遅すぎるという解説がある。“many secondary teachers report that starting Shakespeare with 13 or 14 year olds means unpicking prejudices that his plays are 'too hard', 'boring', or 'irrelevant'.”という一節は、国を問わず古典教育に接した中学生や高校生の多くが抱いたであろう感想を、イギリスの子供たちも持つのだと実感させる。

このような内容は、教員のみならず子供たちにも訴えかける力が大きかったと思われる。古典の授業に生徒がついていけないことに悩む教員は早期からの教育に関心を抱いたであろうし、教育対象である子供たちは、自分たちの実感を物語っているように思われる記述、著名な俳優たちがSUFSを推薦する言葉や、実際にキャンペーンに参加した子供たちの感想に接して、従来とは異なるシェイクスピアへのアプローチに多少の関心を持ったのではないだろうか。

最終ページでは、子供たちにシェイクスピアの魅力を伝えるためにさまざまなプランがあると説明している。注目すべきは、RSCのキャンペーンは、DCSFが当時提唱していた「教育的な優先事項」（educational priorities）に沿ったものであると強調していることである。例えば教育の必要不可欠な一部分としての学外活動を奨励するLearning Outside the Classroom Manifestoや、若者のための文化的権利を提唱するThe Children's Planに言及した後、SUFSはこれらの活動にも大いに寄与していると明言している。ブックレット*SUFS*と*Ages and Stages*を併せて読んだ者には劇団と政府の協力する様子が明確にうかがえたであろう。最終ページには協力者のリストが掲載されているが、グローブを初めとする劇団関係者の他にDCSF、研究者、教育関係者との協力によりブックレットが作成されたことが、あらためて明確になる。

一方は政府の発行した、教員への詳細な提案、もう一方は著名な劇団による、複数メディアを駆使した教員および子供たちへの訴えかけで、発行者と対象に多少の相違はある。しかし、いずれも子供たちの感受性を高めるため、可能な限り早期から教育しなければならないことを強調している（RSCは5歳からとは明言してはいないが）。また、演劇をとおした幼年期からの教育がもたらすメリットは、古典作品が退屈なものではなく、現代人にも魅力的なものであると認識させることであるとも主張している。RSCのキャンペーンは、シェイクスピア作品は演ずるものであるという側面をさらに強調したものであり、政府のキャンペーンを補完する役割があるといえる。

RSCはこのキャンペーンが展開される以前も児童・生

徒による劇団訪問や彼らへのワークショップをしばしば担当しており、演劇教育にも労力を割いてきた。前述のように早期教育プロジェクトに関してはRSAと協力したし、イングランド地方でのシェイクスピア教育の歴史を簡潔にまとめたブックレットをもこの年に発行している。RSCは政府から多額の助成金を給付されており、イギリス演劇を代表する「ナショナル・カンパニー」の一つでもある。[18]そのような地位にある劇団が政府と協力する意図を強く感じさせるキャンペーンを展開したという事実からは、キャンペーンによって自らの地位を保ち、そして未来の俳優および観客を確保しようという意図が感じられる。

## 4　背景およびこれらのキャンペーンへの反応

世界的に著名とはいえ、一人の劇作家の作品をめぐって、政府、演劇関係者、学校教員、研究者、放送局が協力してキャンペーンを展開して、その中で5歳からの教育が提唱されていたという事実を、日本人の多くは多少なりとも奇異に感じるのではないだろうか。この二つのキャンペーンは2008年に数ヶ月の差で展開され始めたが、この年はイギリスにとって大規模な変化が起きた時期の一つといえる。サブプライム問題が波及したことによりイギリス国内の金融不安が意識され始めていた2007年、労働党のブレア政権が10年間続いた後、同じく労働党のゴードン・ブラウン（Gordon Brown）が首相に就任した。2008年のリーマンショックの後、景気の悪化が進み、それが2010年における政権交代の要因の一つとなった。

この時期には経済のみならず教育面の変化も生じている。2007年には義務教育終了年齢の引き上げが正式決定された。[19]背景には、若者の犯罪率の増加、および義務教育を終了した生徒の学力低下という二つの問題があった。前者は、2007年まで続いた好景気がイギリス国外からの労働者の増加という結果をもたらし、それに伴って非熟練労働者に占めるイギリス人若年層の割合が縮小したという事実により発生した。教育年数の延長には、若者の基礎学力を高め技術を身につけさせることで犯罪を減少させようという目的があった。後者については、例えば義務教育が終了する年齢で行われる試験で、数学及び英語において合格点を取得できた生徒の割合は41%に過ぎないというデータが2006年に示されている。[20]このような問題がブラウン政権に危機感を与え、教育体制の改善を図るように作用したであろう。

2007年から2008年にかけて、好景気から一転してイギリスを取り巻く危機感や不安は増大した。そのような状況で、政府はシェイクスピア教育が5歳から義務教育終了後まで全ての生徒に対して段階的に続くような教育体制を提唱して、基礎教育を充実させることに作品を使おうとした。また演劇関係者は演劇文化を守り育てるために演劇の魅力をアピールした。しかし、いずれも理想論の側面が強かったように思われる。シェイクスピア教育を開始する年齢の引き下げは結局行われず、2014年現在、古典教育は未だにKS3から必修とされている。[21]

二つのキャンペーンに見られる、強調された理想のシェイクスピア教育に対して、人々はどのように反応しただろうか。例えば *Ages and Stages* に対しては以下のような意見があった。

> Teachers can make young people's experience of Shakespeare an inspiring one and nurture a lifelong interest in the playwright. But getting to grips with Shakespeare's verse is a challenge for teachers and young people alike. Shakespeare for All Ages and Stages [*sic*] will help by suggesting a range of innovative and practical ideas to help bring Shakespeare to life in the classroom.[22]

上述した意見には、このブックレットがシェイクスピア教育に役立つという肯定的な響きがある。しかし、その一方で以下のような意見もあった。

> The primary curriculum is already overloaded: something would have to come out to make room for Shakespeare, and what would that be? If you were working with students aged four, how much dumbing down would you have to do to make the language of Shakespeare accessible?[23]

現状よりも負担が増えた状態で幼年期からのシェイクスピア教育を始めることに意義があるかどうか、疑問を呈している。またSUFSについても多様な意見があったと思われる。例えば8歳の子供がRSCのワークショップを通して『夏の夜の夢』に関心を抱くようになる様子を見て、その親が当初の不安を払拭してRSCの方針の有効性を認めるようになったという記述がある。[24]

意見の多様さは教育の対象である子供や若者にも見られる。キャンペーンが行われた後でもなお、古典であるシェイクスピア作品を退屈だと感じる者が多数であったことは大いに想像できる。その一方で、実際に演じたところ作品の面白さに気付いたという意見もある。例えば

以下の記事はRSCのキャンペーンをどう思うか、様々な人々にインタビューしたものの一部である。“My five-year-old brother and sister might understand if it was acted rather than read, and perhaps children could benefit from just acting or being told about the characters. I did Macbeth in year 6 and loved it.”[25]

*Ages and Stages*にも*SUFS*にも、演劇的要素を強調した授業やワークショップを楽しいと感じた生徒たちの写真や言葉が掲載されているが、それが全くの誇張ではないことが、この記事からもうかがえる。

シェイクスピアは世界的に知られた劇作家であるが、イギリス国内においては21世紀に入った現在も権威や教養を代表する存在でもあることを、これらのキャンペーンは示唆している。しかし、政府および政府に協力する劇団や組織などの後援を受けたキャンペーンは、多様な反応をもたらし、必ずしもキャンペーンを提唱した人々の意図が全面的に受け入れられるわけではない。今後も社会情勢の変化により、政府や協力する組織によるシェイクスピアの価値は強調されるであろうが、子供たちは作品を様々な形で受け止めるものと思われる。

## 注

1) Gilbert.
2) Richardson.
3) *Ages and Stages*.
4) “National Curriculum Online KS1”. 読みやすさを考慮して、アルファベットの項目の後に片かっこを付した。以下、KS1の英語カリキュラムに関する記述はこの資料から引用されている。
5) “National Curriculum Online KS2”. 以下、KS2の英語カリキュラムに関する記述はこの資料から引用されている。
6) “National Curriculum Online KS3”.
7) Irish, pp. 8-9.
8) Gilmour.
9) *Ages and Stages*, p.1.
10) Ibid., p.5.
11) Ibid., p.6.
12) Ibid., p.8.
13) Ibid., p.8.
14) Ibid., p.9.
15) RSC “Stand Up for Shakespeare Video”.
16) 2008年にはこのブックレットと共に*Teaching Shakespeare*も発行されている。
17) RSC “Stand Up for Shakespeare”.
18) 日本芸能実演家団体協議会、9ページ。
19) 2013年から17歳まで、2015年から18歳までとなる。
20) “Low-Skilled Youngsters: No End of Them: Employers Have Good Reason to Moan”.
21) “English Programmes of Study: Key Stage3”.
22) Gilbert. この発言はNC制作当事者によるものである。
23) Lacey. この発言は教師のものである。
24) Davies.
25) Lacey. この発言は当時15歳の生徒によるものである。

## 参考文献


Davies, Caitlin, “The Play's the Thing: Can Young Children Be Wowed by Shakespeare?”, *Independent*, 05 February 2009.

Davis, Philip, “Shakespeare for Five-Year-Olds: a Truly Radical Plan”, *Daily Mail*, 16 April 23, 2013.

DCSF (Department for Children, Schools and Families), *Shakespeare for All Ages and Stages*, Nottingham: DCSF Publications, 2008.

DCSF, “National Curriculum Online KS1”, 2008 (http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20080520143531/http://www.nc.uk.net/webdav/harmonise?Page/@id=6001&Session/@id=D_Cmm7xBHq70Xk0nrlw9S7&POS[@stateId_eq_main]/@id=5816&POS[@stateId_eq_note]/@id=5816、2014年5月29日閲覧).

DCSF, “National Curriculum Online KS2”, 2008 (http://webarchive.nationalarchives.gov. uk/20080520143531/http://www.nc.uk.net/webdav/harmonise?Page/@id=6001&Session/@id=D_Cmm7xBHq70Xk0nrlw9S7&POS[@stateId_eq_main]/@id=5987&POS[@stateId_eq_note]/@id=5987、2014年5月29日閲覧).

DCSF, “National Curriculum Online KS3”, 2008 (http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20080520143531/http://www.nc.uk.net/webdav/harmonise?Page/@id=6001&Session/@id=D_Cmm7xBHq70Xk0nrlw9S7&POS[@stateId_eq_main]/@id=6164&POS[@stateId_eq_note]/@id=6164、2014年5月29日閲覧).

DfE (Department for Education), “English Programmes of Study: Key Stage 3”, 2013 (http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20130904095149/https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file

/ 244215 / SECONDARY _ national _ curriculum_-_English2. pdf、2014 年 5 月 29 日閲覧).

Gilbert, Natasha,"Five-Year-Olds to Study Shakespeare", *Guardian*, 7 July 2008.

Gilmour, Maurice, ed., *Shakespeare for All, Volume I, The Primary School*, Cassell: London, 1997.

Irish, Tracy, "Teaching Shakespeare: A History of the Teaching of Shakespeare in England", 2008 (http://www.rsc.org.uk/downloads/rsc_history_teaching_shakespeare_171210.pdf、2014 年 5 月 29 日閲覧).

Lacey, Hester, "Multiple Choice", *Guardian*, 18 March 2008.

"Low-Skilled Youngsters: No End of Them: Employers Have Good Reason to Moan", *Economist*, 26 April 2006.

Richardson, Hannah, "Shakespeare for Five-Year-Olds", 2008 (http://news.bbc.co.uk/1/hi/education/7490360.stm、2014 年 5 月 29 日閲覧).

RSC, "Stand Up for Shakespeare", 2008 (http://rsc.org.uk/sufs、2014 年 5 月 29 日閲覧).

RSC, *Stand Up for Shakespeare, an RSC Manifesto for Shakespeare in Schools*, 2008 (http://www.rsc.org.uk/downloads/stand-up-for-shakespeare-manifesto.pdf、2014 年 5 月 29 日閲覧).

RSC, "Stand Up for Shakespeare Video", 2008 (http://www.rsc.org.uk/education/how-our-work-makes-a-difference/stand-up-for-shakespeare/video.aspx、2014 年 5 月 29 日閲覧).

日本芸能実演家団体協議会「文化政策形成の仕組みづくりのために－海外比較研究と論点整理－」2002年 (https://www.geidankyo.or.jp/02shi/pdf/seisakukeisei.pdf#search='Royal+shakespeare+company+%E3%82%A2%E3%83+BC+E3+83+84+E3+82+AB+E3+82+A6+E3+83+B3+E3+82+B7+E3+83+AB'、2014 年 5 月 29 日閲覧)。